

氏 名	西 尾 吉 兵 衛 にし お きち べ え
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 467 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 44 年 1 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	Verbreitung der lymphatischen Gewebe im männlichen Geschlechtsorgan des adulten Affen mit Rücksicht auf deren Verhältnis zu Gefäßsystem (成熟猿の男性生殖器に於けるリンパ装置の分布, 特に, これと脉管系との関係について)
論文調査委員	(主 査) 教 授 岡 本 道 雄 教 授 西 村 秀 雄 教 授 岡 本 耕 造

論 文 内 容 の 要 旨

本研究において、著者は、多数の成熟日本猿を用い、予め、胸管並びに右リンパ本幹を完全に結紮し、器管内リンパ管の拡張を誘発、これとともに、血管系の方を墨汁をもって充填した。次に、全実験例から、男性生殖器を尿道を含めて、全長にわたって採取、各器官の横断連続切片標本を作成し、複原模型を通じ、リンパ装置の器官内分布および發育状態を追求精査、次の結果を得た。

1) 一般に、被検成熟猿の男性生殖器並びに尿道では、リンパ装置の造成は、リンパ浸潤および孤立リンパ小節の形をもって行なわれ、また後者にあつては、しばしば二次小節の形成や明中心の分化発達を認める。

2) 先ず、成熟猿の睪丸について観察するに、本器官の全域を通じて、リンパ装置の造生はみられない。文献によると、成人の睪丸においても、本装置の發育は認められず(村井)、これに反して、草食或いは肉食類のような、一般哺乳動物の場合には、本器官内に、多数のリンパ装置が、リンパ浸潤の形で、分布発達する(堀井、階堂)。したがって、睪丸リンパ装置は、動物の進化とともに、漸次、退化の傾向を示唆する。

3) 次に、成熟猿の固有生殖道で、全体にわたって、リンパ装置の分布状態を見渡すと、次の点が目立つ。すなわち本装置は、量的發育並びに質的分化の面で、副睪丸の領域、とりわけ、その体部に当たって最高の発達を遂げ、ここから、生殖道の尾側に向って、急速に、減速ないし消退している。かかる所見を、文献に照らせば、成人では、固有生殖道を通じ、副睪丸の体部のみに局限して、貧弱ながら、本装置の出現を認め、また一般哺乳動物の例では、副睪丸の領域で、最大の發育度を示した。リンパ装置が、固有生殖道の尾側の方向へ、漸次散布する(堀井、階堂)。したがって、固有生殖道でも、やはり、本装置の造成は、動物の進化に伴なって、貧弱となり、またその分布区域も、漸次縮小の傾向を示す。

4) さらに、成熟猿尿道を眺めると、ここに属するリンパ装置は、量的にも、また質的にみても、その隔膜部で、最も旺盛な発達を示し、ここから、首側或いは尾側の方向へ、漸次減勢分布する。これに比

し、成人尿道では、全域を通じて、海綿体部のみに限局した、本装置の分布をみるに過ぎない。

5) なお、成熟猿の附属生殖腺について検討すると、先ず、前立腺では、本器官内結合組織の全体におよんで、旺盛な、リンパ装置の分布発育を認めるが、文献的にみても、これと同様な所見が、一般哺乳動物や成人の例について指摘される。したがって、前立腺における、本装置の発育機転は正常な動物例では、つねに一定したものと、見なしうる。また、成熟猿の球尿道腺において、本装置の、きわめて、不良な発育状態をみるが、かかる所見は、一般哺乳動物や成人における、それと、基本的に一致する。

6) 以上のような、成熟猿の生殖系における、器官内リンパ装置の分布状態を基礎として、これと、脈管系との関連組織像を観察するに、本装置では、例外なく、実質内部に、微細な、血液毛細管が、多様な、網構をつくってひろがり、かつ、辺縁部には、小血管群の接存を認め、また、まれながら、これと同時に、拡張リンパ管が、伴行する。しかし、全生殖器官系を通じ、リンパ管のみに、附随して現われ、血管系から独立分布する、本装置の姿は、みられない。

論文審査の結果の要旨

多数の成熟日本猿を用い、あらかじめ、胸管ならびに右リンパ本幹を完全に結紮し、器官内リンパ管の拡散を誘発、これとともに、血管系の方を墨汁をもって充填した。次に、全実験例から、男性生殖器を尿道を含めて、全長にわたって採取、各器官の横断連続切片標本を作成し、復原模型を通じ、リンパ装置の器官内分布および発育状態を追求精査、次の結果を得た。

1) 一般に、被検成熟猿の男性生殖器ならびに尿道では、リンパ装置の造成は、リンパ浸潤および孤立リンパ小節の形をもって行なわれ、また後者にあつては、しばしば2次小節の形成や明中心の分化発達を認めうる。

2) 成熟猿の睪丸については、本器官の全域を通じて、リンパ装置の造成はみられない。

3) 固有生殖道で、量的発育ならびに質的分化の面で、副睪丸の領域、とりわけ、その体部にあつて最高の発達を遂げ、これから生殖道の尾側に向つて、急速に減少ないし消退している。

4) 尿道をながめるところに属するリンパ装置は、量的にもまた質的にみても、その隔膜部で最も旺盛な発達を示し、ここから首側あるいは尾側の方向へ漸次減勢分布する。これに比し、成人尿道では全域を通じて海綿体部のみに限局した、本装置の分布をみるにすぎない。

5) 附属生殖腺についてみると、まず前立腺では本器官内結合組織の全体におよんで、旺盛なリンパ装置の分布発育を認める。球尿道腺において、本装置の発育はきわめて貧弱である。

6) 以上のような成熟猿の生殖系における器官内リンパ装置の分布状態を基礎として、これと脈管系との関連組織像を観察するに本装置では、例外なく実質内部に微細な血液毛細管が多様な網構をつくってひろがり、かつ、辺縁部には小血管群の接存を認め、まれながらこれと同時に拡張リンパ管が伴行する。しかし、全生殖器官系を通じ、リンパ管のみに附随して現われ、血管系から独立分布する本装置の姿はみられない。

以上本論文は学術上有益であつて医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。